

大岡越前の独立

直木三十五

青空文庫

便室べんしつ（老中ろうじゆう）が、城内で、親しい者と話をする小部屋）の襖ふすまを開けると

「急用で御座りますか」

と、口早にいつて、越前守えちぜんのかみは、松平伊豆守信祝いずのかみのぶとき（信綱の曾孫そうそん）の前へ坐った。

「急用と申すほどで無いが——天一坊てんいちぼうと申す者の噂を聞いたか？」

と、信祝は、唇くちびるで微笑しながら、じつと越前守の眼をみた。越

前守は、うなず頷くと

「何か、所司代しよしだいより申越して参りましたか」

奥坊主が、廊下で

「お茶をもつて参りました」

と、大声を出した。越前守が、手を叩くと、襖を開けて

「お寒う御座ります」

と、御叩頭おじぎをして、二人の前へ、茶を置くと、しとや淑かに出て行つ

た。茶室好みの小部屋へは、もう夜が、隅々すみずみへ入つていて、沁し

みじみ々と冷たさが沁しんだ。

「御落胤ごらくいんと称して、確かな証拠品も所持致よしす由、今、御上おかみへ、

御覚おおぼえが御座りますか、と聞くと——」

信祝は、高声に、笑うと

「お上もあれで、若い時分には、中々御たつ者だつたのだのう。
 まだ、もう二人いるはずだが、と、そう現われて来られては堪らぬ。そこで、——もし、正真の御落胤であつた場合には、何う処置してよいか」

信祝は、ここで言葉を切ると、じつと、唇を曲げながら、越前を見た。越前守は、黙っていた。信祝は、茶碗の蓋を置くと、熱い茶を口許までもつて行つて

「偽者と明かになれば、申し分は無い。万一御落胤ときまつた折には——何と申すか」

一口茶を啜ると

「大義親しんを滅めつすともいふか、徳川家のために、仮令たとい、本物であらうとも、贗者にせものとして処置しなければならぬ」

信祝は、茶を下へ置いて、朱塗火鉢を撫でながら

「その訳は——下世話げせわにいう、氏うじより育ち、二十を越すまで、素す性卑じょうしく育つた者を、この城中へ入れることは、いろいろと弊

がある。二つには、この周囲には、浪人者の不逞ふていな徒輩とはいがいるら

しい。この者の処分に万一口出してもあつて、そのままに附けて

おくと成ると、患わずらいの種を蒔まくことになる。御当家万代ぼんだいのため

には、忠直ただなお、忠長ただなが、忠輝ただてると、いろいろの例もあり、この事

は、お上も、よろしく取計らうようとの御言葉もあり、よし、本物であらうとも、贗者として、越前——処分してもらいたい、何ど

うじやな」

越前守は、俯うつむいたままであつた。

「不和、不穩もとしいの基もとに相成るから、不憫ふびんであつても、嚴重に処置する方策をもつて臨んでもらい度たい——と、いう相談じゃ」

「よく判りました」

と、越前守は、顔を上げた。

「とくと、勘考かんこう仕かまつりますが、府内ふないへ到着するまでには、未まだ未まだ余日よじつもあること。到着の上にて——」

「それはそうじやが、今申した事を忘れぬように——到着致したなら、すぐ召捕めしとつての」

「とくと勘考致しまする」

越前守が

(とくと、勘考致しまする)

と、いったなら、その上、誰が、何うそれ以上の奥をいわせようとしても、いうものではなかつた。越前守は、一人の勘定^{かんじようが}方^たを撰択する時に

「百を二つに割ると、いくらだ」

と、聞いた。五十——明かすぎる五十であるが、その人は、算^そ盤^{ばん}をもつてきて、百と置き、二と置いて、一々弾^{はじ}いてから

「五十で御座ります」

と、答えた。越前、微笑して

「よろしい、勘定方は、そこまで、念を入れなければいけない。

よろしい」

と、称^ほめたが、その念入りの越前守が

「とくと、勘考致します」

と、二度までいったから、信祝は

「頼む」

と、いつて、余談に移った。

二

低い灰^{はい}空^{ぞら}だ

——雪になるか？

雨になるか？

沁^{しみ}々^{じみ}

と冷た

さの沁^しむ黄^{たそがれ}昏^{くれ}だ。

信祝^{のぶとき}は、

蒔^{まきえ}絵^えした

黒^{くろ}漆^{ろうし}

の大火鉢へかけ

た金網の上へ、背中を丸まろめながら、唇を歪ゆがめたり、眼を閉じたり
 —それから咳せきをしたり—咳は、寂莫せきばくとした小書院こしよいん一杯に
 反響して、けたたましかった。

「阪井右京さかいうきよう、只今、立戻りまして御座りますが——」

と、廊下で足音が止まると、障子の腰の所で、澄んだ声が出た。

信祝は、身体からだを起すと

「これへ」

と、いった。

「灯ひをもて」

と、去って行く足音へ声をかけると、炭火を掻かき分けて、坐り直した。夜が、薄くかかってくる障子へ、灯の影が動いて、足音

が近づくと

「阪井右京めに御座ります」

「戻ったか？ 許す」

と、信祝は、微笑した。灯が、障子に近々と揺れると、右京の背後から、二人の腰元が、燭しよくだい台たいを捧ささげて、入ってきた。その裾すその下を右京は、二、三尺膝しつこう行すると、平伏して

「つつがなき御尊体を拝し——」

と、いいかけると、信祝は、手を振って

「挨拶はよい。ここへまいれ」

と、いうと、燭台を置いた女中へ、眼で、早く去るように合図をした。

「見苦しき装なりにて、御眼おめを汚けがしまする」

「正しょうか？ 贗にせか？」

と、両手を膝へ置いて、俯うついている右京へ問いかけた。

「御落胤おんらくいんに相違御座りませぬ」

信祝は、右京の鬻まげをじつと凝視みつめながら暫しばらく黙もくっていた。

「越前から、誰か、調べにまいったような形跡けいせきはなかつたか？」

「越前から？——と、仰おほせられますと」

「忠ただすけ相あひじゃ」

「はっ、越前守からは、一向いっに、未いまだ、そのようの様子も見受け

ませぬ」

「うむ——」

信祝は、火箸を灰へ突立てて押えながら

「残りなく、調べたのう」

「はっ、村役人、庄屋、近くの者共、郡奉行所へもまいりまして御座りまする」

と、懐中から、村役人、郡奉行在判ざいはんの天一坊の身許についての、調査書を出すと、

「御覧下されませうよう」

と、前へ置いた。信祝は、燭台の方へ向くと、大判美濃紙みのがみを薄く綴つづった書類を眺めて

「ふむ——存じ寄り申さず、が、多いの」

「はっ、澤さわの井いと申される女子おなごも、その母親も、十数年前に死去

致し、郡奉行、村役人とも、当時在勤の者がおりませず、ただ、近所の百姓共の申し分には、確かに、御落胤らしき小児しょうにが、感か応んのういん院いんにありました、いつの間にかいなくなったと、申すばかりにて、皆々天一坊を御落胤と心得ておりまする」

信祝は、書類を置くと

「大儀であつた——近ちかぢか々、もう一度行つてもらいたい」

「はっ」

「寒かつたであらう、道中は——」

「左さほども御座りませぬ。御前ごぜんの御好物、蜜柑みかんを持ち戻りまし

て御座りますが——」

「うむ、珍ちんちよう重じやうじやの、この冬にない初物じや、ゆつくり休む

がよい」

右京の去った後で、信祝は、もう一度書類を読み直したが、床の間から、革帯のかかった手箱を取ると、錠じょうを開けて、下の方へ仕舞しま込んでしまった。

三

「伊賀いが、よかつたなあ」

と、越前守を送り出して、赤川大膳だいでんと、部屋へ入ってくると、天一坊は、しとねの上へ立ったまま、感嘆的に、だが、低い声をかけた。山内伊賀亮やまのうちのいがのすけは、伏目のまま、黙って自分の座へ坐つ

た。天一坊が坐りかけて、何かいおうとするのを眼で制している
と、二人の女中が擦り足に入ってきて、眼も上げずに、越前守の
坐っていた座布団をもつて行つた。天一坊の背後にいた常楽
院が

「いや、山内殿の智弁には、今更ながら、つくづく恐れ入つた。
流石の大岡越前守も、一言もなく、尻尾を捲いて引退つて
行つたがいや、感服感服」

伊賀は、黙つて、両腕を組んだまま俯いていたが

「いいや——」

と、低く呟くと、首を振つた。

「何か——」

と、大膳が、三さん宝ぼうの上の勝かち栗ぐりをつまみながら、伊賀の顔を覗くと

「越前の肚はらが判らぬ」

「肚とは？」

「飴あめ色いろ網代あじろの乗物へ乗った訳は？、とか、紫むらさき地き、花はな葵あおい

の定紋幕じょうもんまくを打った訳は？、とか——それほどのことを、わざ

わざ聞くような越前ではない。彼奴きやつは、ちやんと心得ていて聞いたのだが、聞かれると、返答せん訳には参らぬ。拙者せつしゃが答える

と、じつと、拙者の顔を、ちらつと、天一坊殿の顔を——」

「左様、拙者へも、じろりと、薄気味の悪い眼を向けたが——」

「越前は、よく人相を見るといふでないかのう」

と、常楽院が、衣ころもを捲まくり上げて、長煙管ながきせるへ煙草たばこをつめながら、口を出した。

「人相はともかく、問答に事よせて、顔がん色しよくを覗うかがいにまいった。御落胤いつわか、偽いつわり者か、問答しながら、顔色を見ようと——うまうまはま餛はまつた」

と、伊賀亮は、俯かぶいて、眼を閉じた、越前守が、伊賀亮へ「飴色網代の駕かごへ、何故なぜ、許なげしもなく御乗り召さる」

と、いった口調は、返答によつては、差置さしおかぬぞ、という鋭ささばが含まれていた。人々はそれを伊賀亮が、何どう捌さばくか？、この問答が一期ごの浮沈である、心臓あえを喘あえがせながら、血を冷たくさせながら、全身的の緊張で、聞入きこったが——天一坊が、御落胤なら

ば、飴色であろうと、三つ葉葵であろうと、そんな事は、末すえの話であつた。

伊賀亮は、十分にそれを承知していたが、そう詰きつもん問されて、答えない訳には行かなかつた。だが、答えて、明快に説明していると、天一坊も、大膳も、常楽院も、少し顔を赤くし、全身を固くし、こめかみをふくらせて、微笑したり、目を見合せたり——そして、越前守は、伊賀亮の話を聞くよりも、四人の顔色の變化を、じつと伺っている方が多かつた。少くも、伊賀亮には、越前のそうした態度がよく判つていた。

だが、越前が、皆の顔色かおいろを見ているから、表情を変えぬようにはとはいえなかつたし、中座して、それを一同に伝えて、越前守の

眼を警戒させるには、既に遅くなりすぎていた。天一坊が、真しんし正ようの落胤であるという事に、疑いの無い以上、そういう問答によつて、顔色を変える必要は無かつたが、人々は——天一坊も、附つけ人も、越前を名判はん官かんであると信じ、その証拠物の調べにより、この問答の巧拙こうせつにより、もしかしたなら、何が何どう成るか、判らぬと考へていただけに、伊賀亮との一問一答には、汗を出したのであつた。

「ふむ」

と、大膳は、かちかち音立てて嚙かんでいた干栗ほしぐりを、頬の中へ仕舞しまいながら

「成程——」

「余を贖者にしようというのか」

と、天一坊は、口早に、額を蒼白くしながら、叫んだ。伊賀亮は、俯いたまま、首を振って

「そうでもない」

「それでも無いと？——」

伊賀は黙っていた。一座の人々は、不安な空気に圧迫されて、いろいろな幻想を、急速に廻転させながら、伊賀の広い額をじつと凝視^{みつ}めていた。

四

淡彩たんさいで、雁かりを描いた老中の溜りたまの間にいた信祝のぶときは、越前が登城したと聞くと

「便室へ」

と、奥坊主にいって、立ち上りながら、稲葉佐渡守いなばさどのかみへ

「頑固者じやのう」

と、微笑すると、両手を突出し、腰を張って、延びをしながら「何どうれ」

といつて、廊下へ出た。うんげん縁べりの畳たたみ敷じきで、天井の高い広廊下は、凍った風で寒かった。信祝は、急ぎ足に、一つ角を曲ると

「御待ちで御座ります」

と、薄暗い廊下に、坊主がうずくまって、平伏していた。信祝は、狩野かのうまさのぶ正信の宝船の茶がけのかかっている床の間を背に

「存外、早かったのう」

と、坐った。

「取調べて参りました」

「ふむ、そして？」

「正しく、御落胤まさに相違御座りませぬ」

信祝は黙って、越前守の襟元へ眼をやっていた。

「御墨附、御短刀とも、正真の上は、御落胤と認めるより外ほかに、御座りませぬ。しかし、紀州いにおいての取調べによつて、如何いかに相成りまするか！ 早速人を遣つかわす所存で御座りますが、生しょうこ

国、生地しょうちにおいて、御落胤おとしごで無いという証拠あがの挙あがらぬ限り、偽者として処置致すことは、越前の役儀おもての表として、出来兼ねまする」

「しかし——」

と、信祝は、おつかぶせて

「先ごろ申した通り大の虫を殺して、小の虫を生かす諺ことわざだのう。

あの附人うちの中には山内伊賀亮などと申す、中々の強したたか者がいるとの事だが——」

と、越前の顔をみた。

「中々、天晴あつぱれな者で御座ります——」

「司政者として、得体の知れぬ者を、よし正真の証拠品あががあろう

とも、御当家の為ために——」

「いいや、正真の証拠品が有らば、得体は知れておりまする」

「得体がよし知れておつても、この間申した如ごとく——」

「なれど、司政の根本は、物を正すに御座ります。正しきを正しきとし、曲れるを曲れるとし——」

「それは、よく存じておる。越前が、判官として、そう申すのは、重々、信祝も解かいせる。然しかし天一坊の事は、重大で、時としては、司政の都合にて、法を枉まげる事も——」

「いいや、法を枉まげてよい司政は御座りませぬ。正しき証拠のある者を、罪にする事は、司政の根本くつがえを覆くつがえす事で御座ります。もし強たつてとの仰おほせならば、越前に代つて、南町奉行を余人に申し

つけ下され度く、越前が、職におりまする限り、御老中の仰せ、
公方様の仰せで御座りましようとも、罪無き者を罰する事はでき
ませぬ」

信祝は、不機嫌となつて、唇を瘡^{けいれん}癩^{れん}させていた。

「然し——未だ、紀州の調べも済まず、万事は、その上のことで
御座りまするが、越前が職にある限り、法を方便には用いませぬ。
このことが、もし庶民に判りました節は、天一坊を御城内へ入れ
ましたことよりも、人心には危機が参りまする。人民が、司政者
に依頼するは、司政者が法を枉げず、法は司政者によつて歪^{ゆが}めな
いからで御座りまして、罪なき者を罰したとあつては、一国の法
も、司政者の権威も、その時より地に墜^おちまする。天下の人心が、

御司配を頼まなくなりまると、天一坊が、ここへ入りますると、何れが重大か——」

「それは、判つておるがの。そつと処分して洩れなければ——」

「判官としての越前の良心が許しませぬ。判官に、法を守るの良心が無ければ、法が乱れ、法の乱れは、政治を乱す基で御座りまする。判官は、洩れなければよい、と申すような心掛では勤まりませぬ。壁にも耳、徳利にも口と、寸分、間違いのないことを、法に照らして処断するのが務に御座りまする」

「紀州へは、すぐ使を出すか？」

「取急ぎ打ち立たせまする」

「それでは、万事その上と致そう。いや——越前の——」

と、信祝は、朗らかに笑つて

「そうなくてはならぬ」

と、幾度も頷いた。

「恐れ入りまする」

「世間で、評判のよいのも尤^{もつと}もだのう、とてもかなわぬわい、越

前、あははは」

と、信祝は、便室一杯に笑つた。

五

松平信祝からの火急の使者が来たので、紀州家附^{つけがろう}家老、安藤

たてわき
 帯刀は、自慢の南紀重国の脇差と、蜜柑ひとかご一籠とを、家来に
 持たせて、駕かごを急がせてきた。

と
 信祝は、寒さに、鼻の頭を赤くしながら入ってきた帯刀をみる

「済まぬ」

と、軽く、御辞儀をした。

「大事なな」

と、六十をすぎた帯刀は、すぐ火鉢を引寄せると、口早に聞いた。

「手を、お借りしたい」

「さあさあ、いくらなりと」

「天一坊の一件じゃが——」

と、声を落すと

「越前が——」

と、大岡越前守の意見を話して

「それで、彼奴きやつの下役が、紀州へ行かぬ内に、何か、贖者だとい
う証拠品こしらを拵こしらえておいて、使が行つたなら、それを拵つかませて戻し
てもらいたいが、心きの利いた、口の固い者を一人、二人——」

「うむ、御安い御用」

「そこで——」

と、信祝は、阪井右京の持つて戻つた書類を出して

「郡奉行に、村役人は、これは頭せんぎふゆきとどきごなしに、詮議不行届、天一

坊は贗者で無いか、こういう証拠があるのに、前任者へ責任を転嫁せんかさせるとは、不都合千万せんぼんと、叱つてもらえば、一も二もあるまい」

「成る程」

「庄屋、百姓たぐいの類には、流言りゆうげんをふり撒まいてもらえば、無智な徒輩やからは、手もないて」

「うむ。万事承引、即刻、打ち立たせよう、越前の手とて、よも、今夜には、立つまい。これから戻つて、早馬みちならば四日路、町奉行てつけ手附では、十日はかかろう、よしつ」

と、いうと、帯刀は立ち上つて

「重国が、一本出しゅつたい来きしてまいつた。御氣に召さば、御差さしりよ

料うに」

と、挨拶すると、老人は、信祝が合ひもの紐を引いて、鈴を鳴らすのも待たないで、襖ふすまをあけた。一ひとま間へだたつた所にいた侍が、周章あわてて立つと

「御帰館に御座りますか」

と、御辞儀をした。

六

「これは、御奉行様」

と、庄屋は、炉へ投出していた脚を、周章あわてて引込めると、襟えりを

合せて、坐り直した。下男は、牛小屋へ引込むし、子供は、母親に引張られて、吃驚びっくりしながら、納戸なんどへ逃込んでしまった。庄屋は、不意ふいの郡奉行こおりの訪問に、心臓をしめつけられながら、炉べりで平伏した。

「少し、尋ねたい事がある」

「はい、はい」

と、両手を突いたまま平伏してしまっていた。

「上あがらしてもらどうぞ」

「はっ」

と、いった庄屋は、洗足すすぎの水を取らせようと、家のものを見廻したが、誰もいないので

「これはこれは」

と、いつて両手を突出している内に、郡奉行は上ってしまった。

「流石さすがに寒いもう」

と炉へ手をかざしていると、一人の侍が入ってきた。奉行は振向くと

「さ、こちらへ、むさい所で——」

と、いった。庄屋は

「誰か、早くお茶をもつて来んかい」

と、怒り声で叫んだ。

「宇兵衛うへえ、これだが——」

と、一人の侍のもつてきた包つつみをあけると郡奉行は、菅笠すががさを取

出した。

「はい、はい」

と、庄屋は、両手を突いた。二人の侍の背後を、庄屋の女房が、両手を膝まで下げながら、おずおずと通ると

「早うせんかい、馬鹿が」

と、庄屋が叱った。

「見覚えがあるか」

宇兵衛は、首を傾かたむけて、両手を膝へ置いてじつと菅笠を見てい
ると

「それ、宝ほうたく沢と、そこに書いてあるの」

「はい」

「宝沢とは、誰の事か存じておるか」

「宝沢？」

と、宇兵衛は、首を傾けた。

「宝沢？——はてな、宝沢さん」

「感応院の小僧の宝沢を存じておるか」

「あつ」

と、宇兵衛は、右手を宙に上げると、笑顔になつて

「あの、天一坊様」

「うむ」

「そうそう、あの方は、幼な名が宝沢、これは、あの天一坊様の」

「所で、あれが、とんだ贗者での」

「ええつ」

「江戸表から、取調べの役人がおもてまいられて、この証拠の菅笠を御見付けになったが、それ——この黒い所は血じゃ」

宇兵衛は、頷いて、口を開けたままであつた。

「宝沢を殺しておいて、御墨すみつき附と、短刀とを奪取つて、まんまと、贗者め、天一坊に成りすましておるのじゃ」

「はあ——」

と、宇兵衛は、血の跡だという黒い斑点と破れた所とを眺めていた。

「そこで、これは、宝沢の書いた字にちがいないと思うが、どうじゃ」

「はいはい、左様で御座いましょう」

と、宇兵衛が、首を曲げて覗いていると、一人の侍が

「偽りならば、偽りと申せ」

と鋭くいった。

「いいえ、正しく、宝沢さんの手で御座います、はい」

「偽りであるまいの」

「いいえ、貴下様——」

と、宇兵衛は、眉を歪めた。

「村方の者共、天一坊のことを、いろいろと取沙汰致しておるが、

並の噂とは、ことかわり、迂闊に、宝沢が天一坊などと申すと、

咎めに遭うぞ」

宇兵衛は、膝の上へ頭をすりつけるように叩頭おしぎした。

七

大岡越前守の手の紀州調べの使つかいとして、同心平田三五郎ひらたさんごろう、外ほか一人の者が、平沢村へきた。そして、第一番に、郡奉行こおりの所へくると

「重々、お詫び申上げねばなりません」

と、郡奉行は、二人を客間へ案内すると、すぐにいった。

「お詫びとは？」

「以前、御老中松平信のぶとき祝いわ様より、御取調べの御使の参られまし

た節、せつにわか俄のこととて、取調べもつかまつ仕らず、と、申しまするは、拙せつし者が当地へ赴任仕らぬ前のこととて、一向に何事も存じ申さず、その由をよし申上げておきました所、紀州家にてもいろいろの御詮議あり、先日、御落胤に疑い無き宝沢と申される方は、実は、何者のためにか、ここを去る三里余り、四方しほうかた形峠の辻堂にて御殺害にお遭いなされたよし、その殺害者が、当時の天一坊と思われまするが——」

「して、その——証拠は？」

「ただ一つ。宝沢殿の御冠おかぶりなされた菅笠、只今これへ持参致させまする」

女中が、酒肴しゅこうを運んできた。

「まず、いっこん「一献」

「いや、その儀は、取調べ確定の上にて」

と、三五郎は、強硬な口調でいった。郡奉行は、手を叩いて、下役を呼ぶと

「一件の菅笠をもて」

と命じた。土蔵へ仕舞しまつてあつた菅笠が二人の前へ置かれた。

古びた、雨うたしになつた、微かすかに、宝沢同行二人ににんと読める、所々裂け目のついた菅笠であつた。

「なるほど」

と、三五郎は、障子の方へ笠をやって、じつと眺めながら

「血で御座ろうな」

「左様、無残むざんにも、頭から、ぼつさり浴びせかけたと見えまする」

「御下役を一人、その辻堂まで、拝借を御願ひ致したい」

「かしこまりました御座る。三里と申しても四里近く御座ろうが。

道は左程さほどでも——」

と、手を叩くと、案内を申しつけた。

三五郎は、それから、庄屋を、村方を、感応院を調べた。人々は宝沢という可愛い子供がいたが、いつの間にかいなくなつた。

多分殺されたらしく、今の天一坊は、贗者だ、多分宝沢を殺して、御墨附と、短刀とを奪取つて、凶々しく、御落胤と称しているのだらうと、噂した。

三五郎は、証拠品として、菅笠を、それから、人々からの聴取

書を持って、江戸へ引返してきた。

八

数寄屋橋の唐金の擬宝珠は、通行人の手ずれで、赭く光つていた。南町奉行所へ、対面についての心得をききに、天一坊が通るといので、人々は、橋だもとに集つて、河を眺めたり、焼餅を食べたり、だいどううらないし大道卦占師の口上を聞いたり、隣の人と話を交えたりしていた。

「下婢をつまむのは、こちとらだけだと思つていたら、何うでえ——」

「何んしろ、暇だからのう、下々しもしも様のうに何処どこ、此処ここと、のたくり、ほつつける訳じゃあなしさ——今だつて、七人か、八人かの御子様だろう。それが、四腹ふくか、五腹ごふくさ。その上に、今度こんだあ、恐れ乍ながら、御願ごんい申上げ奉ります牛の骨、馬の骨と来らあ。どうでえ、手前てめえできのいい女郎ぢやうらうに、子供を生ませて——とこう眺めていると、鼻は獅子鼻しし、齒は乱らんぐい杭くい、親の因果が、子に報つらいて面つらだなあ」

「へん、俺に似なくつても、あいつに似りや天神様みたいなせがれ倅せがれだ」

「と、知らぬは亭主ばかりなりつての」

「叱しツ、手先が混つてやあがる」

と、一人は、周章あわてで、袖を引いた。

「何処に？」

「そら、身なりを変えて」

「彼奴あいつかい、あはははは、うっかり、將軍助平などというおう物なら、来た来た、うまく化けてやがらあ、商売々々だ」

「天一坊が、贗者だって噂もあるじゃあねえか」

「うむ、事によったら、橋の上で大捕物になるかの」

町人達が、橋の上で、濠ほり端ばたで、話している真中を、徒歩で、馬上で、侍が行きかかっていた。

「元和げんな、慶長けいちように兜かぶとくび首を取って二百五十石、それ以来、知

行が上ったことがない。式目しきもくの表おもてでは、士分しぶんの者三人を召抱え

ていなくてはならぬが、妻子五人が食べ兼ねるのう。それが、

ちよつと
一寸、手がついて、男の子だと申せば、天一坊も、少くて五万

石」

「いや、部屋住ずみであろう」

「部屋は部屋でも、部屋がちがう」

と、大声に話しながら、二人の国侍が、おおまた大股に通りすぎた。

「いくら、御落胤だつて——」

「然し、仕方がない」

「だって、お前」

と、いうような会話が、口々に取かわされていた。

九

玄関を通つて、廊下へ出ると、左右の部屋部屋には人々が居並んで、頭を下げていた。天一坊は、得意と、満足と、それから、こういう厳肅さに慣れない興奮とから、ぼんやりしながら、歩いて行くと、正面に、板戸のある上り口あががあつた。その二、三間前げんまで行つたとき、板戸が、後方へ開かれると、大岡越前守が、上り口の正面の上に突立つていた。天一坊は、心臓を圧迫されて、眼で微笑しながら、軽く御辞儀をして、近づいて行くと

「天一坊」

と、越前が、大声でいった。そして、一人の侍の差出した菅笠を、左手に、天一坊へ突出して

「見覚えあるか」

と、烈はげしい口調であつた。すぐ、後方につづいていた赤川大膳は、全身の神経で、四方にいる越前の手先達を眺め廻した。天一坊は何故なぜか判らなかつたが、越前守の言葉が烈しいので、首を差出して、菅笠を覗き込むと

「宝沢とは偽り者めツ、それツ」

と、叫ぶと、右手で、胸を突いた。天一坊は、よろめきながら、何どういつていいか？、何うしていいか？、判らなかつた。自分が、本当に御落胤か、ちがつているか？、山内伊賀亮に、そういわれると、そういう気もしたが、越前守に

「宝沢」

と、呼ばれると、氏も、素性もない宝沢という気もした。母親は、彼の生れた時に死んだし、彼としては、自分で、落胤だと信じていい何の証拠も無かった。

「偽り者めッ」

と、いわれたから、それを否定しようと思つたが、一年半近く、御落胤と信じていて、とつくに、宝沢の生活を、自分の記憶から捨てていた天一坊にとって、二つの生活が、余りにちがっているが為、総すべてが——今、胸を突かれた事も、誰かが、両腕を押えていることも、赤川の叫びも、常楽院の号泣も、騒がしさも、一切が、夢のように感じられた、極端な二つの生活が、混乱して、頭の中で、素早く廻転し、明滅すると共に、

「いいえ」

と、叫んで、首を振ったが、越前守はもういなくなっていて、縄が手首へ食い込んでいた。

「立ちませ」

と、耳許で誰かが叫んで、背を突いた。大膳も、両腕を上げながら、五六人の役人に、食い下がられていた。左右の部屋々々には、多勢の人々が、たすき襷をかけて立っていた。

伊賀亮が、落胤だといった時、それから後の生活、それから、今——それらは総て、感応院の宝沢としての馴なれた生活からみると意外の夢ゆめばなし話であつた。天一坊は、こうして縛られたのも夢で、又すぐ、思いがけない事が起つて、今度は、將軍の側そばにい

るようになるかも知れぬ——何が何んだか、ここ一年余り、自分では何^どう考えても、訳の判らない事ばかりだ。

「どうにか、又、成るだろう」

と、思いながら、動かすと、しめつけて痛む程に、^{いきどお}憤りを感じながら

「世の中って——妙ですな」

と、役人へ、笑った。

「不敵者ツ」

と、一人が睨んだ。

「大胆者めが」

と、一人が、いった。

十

「只今、阪井右京殿よりの、火急の御口上、申上げにまいりました
たが」

と、御使番、しんどうさいごろう進藤才五郎が、老中溜り間の次から、信祝へい
つた。

「それにて申せ、大事ない」

老中は、三人、火鉢を真中にして、何か笑っていたが、

「只今、南奉行御役宅におきまして、天一坊常楽院、赤川大膳以下を召捕りまして御座ります。供の者一同も、数寄屋橋を固め

て駕かごの者まで残りなく——」

「山内と申す奴は」

「品川の旅宿にて、切腹との儀に御座ります。以上、口上に御座ります」

「御苦労」

才五郎は、平伏すると、そのまま二三尺うしろ後方へ退さがつて、もう一度平伏して、立上ると、出て行つた。

「やったの」

と、信祝は微笑した。

「越前め、又、何どういう所存になつたやら」

と、稲葉が、呟いた。

「ここだけの話」

と、信祝は、声を低めた。

「あいつは、融通ゆうずうの利かぬ男じゃから、帶刀たてわきと談合の上、丁ち度ようど、感応院の蔵の中に、宝沢の笠のあつたのを幸い、犬の血をつけて、切り目を作つての、越前の下役共の先廻りをして、これを贗者の証拠品にしておいたのじゃ。越前めそれを探し出して、贗者と考へたらしいが、とんだ手品をさせられたものじゃ、あははは」

と、朗らかに、得意そうに、笑つた。

「判官としては、古今無類の仁じやが、政治の妙機みょうきは判らぬで
のう。法は活物いきもの、臨機応変に妙味があるが、越前のは理非りひきよくち

曲直よく、ただ法を枉まげない事に専もつらで——」

「と、申しかけると、あいつ又、いろいろこねるでう」

「法は、時世じせいと共に、移るもので不変ではない。わしの考え、わしが越前なら、天一坊の処分は、菅笠が無くとも、こう考えてよかろうのう。つまり、その時代の人心に、司政者りに利のある時には、法を枉まげてもよい、と。天一坊の場合は、明あきらかに、かかる者を御落胤おんりやくとして認める事は、天下人心によろしくも無く、御当代のふためにも不為ふたじゃ。こういう時には、假令たとい、証拠品しやうこが無くとも、贗者おんしやとして処断する、つまり、法の活用じゃ」

「至極——至極」

と、信祝は、稲葉へ頷いた。板倉が、

「それでは、処分は、五手がかりと致そうか」（五手がかりは、南北町奉行、寺社奉行、お目付、老中総立合いの裁判である）

「よろしかろう。世間にもいろいろと取沙汰のある折柄おりから、処断を明かにするのは利益であろう」

「それでは、月番の足そこもと下に、御頼み申そう。ああ、肩の荷が降りた。そこでさききの話のつづきじやが、その女が？」

と、信祝は、板倉の顔をみた。

十一

天一坊の処刑が済んでから、暖かい一日、安藤帯刀老人が、越

前守を訪ねた。そして、話の末に、

「あの菅笠は、ほんとう真正で御座るか」

と、自分の計画が、何の程度大岡を欺き得たかを知りたさに、同時に、それは、越前守の器量を試す事にもなるという意味から、聞くと、越前は、微笑して、

「ははは。御老人は？」

と、じつと瞳をみた。越前に軽くこういわれて、瞳をみられると、帯刀は、看破しているのかな、とさえ考えて、軽く狼狽したが、

「そこもと足下の判断に間違いはあるまいが——」

「いかにも、笠の真偽でなく、判断の当、不当」

「と、申すと？」

「笠は、誰かの悪戯いたずらかも知れませぬが——」

と、いつて越前は俯いた。

「越前が、紀州を調べ、証拠品を押えて戻り、贗者と断じて、処分したとなれば、よし天一坊が、真正ほんものの御落胤であろうとも、人民の心には揺ぎがまいりませぬ。信祝殿は、当代の発明者にて御座りまするが、拙者の如く、尽つくすべき事を尽して後に処断するのではなく、ただ大局論として、奉行所の職分を無視して居られる如く心得られまする。調べるべきを調べ、求むべきを求めて後のちの処刑ならば、よし、後日あの菅笠が、信祝殿の御指図さしずによつて、造られたものと判りましたにせよ、越前が、うまく一杯かかっただ

けにて、その不明な点に責任はあろうとも、人心はそこまで調べた奉行所へは、矢張りやは信頼をもちます。調べもせず、つまり、奉行所がありながら、その職務を、御上おかみの都合にて、如何いかようにも左右されると、庶民に思い込ませるよりは、越前も失策した、然し、よく調べはしたと、庶民に思われる方が、司政者としては、政まつりごとに忠なるものと、心得ます。天一坊を嗣子ししとすることの人心への影響は、越前とても十分に心得ておりますが、某それがし、奉行として、法を守る限り、飽くまで、法に従って、庶民が安心して、法によるように致したいと存じます。」

帯刀は、暫く俯いて黙っていたが、呟くように、

「あれは、わしが作らせた」

と、いった。

「素人細工しろうとぎいくで御座りますな」

と、越前守は、笑った。帯刀は、顔を上げると、涙を浮べていた。

「頼む、越前、家の宝、国の宝」

と、いうと、感激し易い老人は、涙を、頬へ伝わしながら、
「そう無くてはならぬ、恥はじい入る、恥入る」

と、両手を膝へ突いて、着物の上へ、涙をぽたぽた落した。

青空文庫情報

底本：「傑作捕物ワールド全10巻 第6巻 名奉行篇」リブリオ出版

2002（平成14）年10月31日初版1刷発行

底本の親本：「直木三十五全集第20巻」示人社

1991（平成3）年7月

※「そうでもない」と「そうでも無い」、「部屋部屋」と「部屋々々」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「大岡越前《おおおかえちぜん》の独立《どくりつ》」となっています。

入力：岡山勝美

校正：北川松生

2015年12月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大岡越前の独立

直木三十五

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>